

マイゾウ・メーノス（まあーまあー）の世界 ブラジル

ブラジルを訪問する人、ブラジルに関心のある人にお勧めする！！

梅津 久 記

第32話－刑務所は樂園

法律の世界でいえば、極端なのが刑務所の中での囚人の扱い、ここにも“マイゾウ・メーノスの世界”があり、金で扱いが変わってしまう。金があれば、テレビ、ステレオ、冷蔵庫なんでも不自由しない程度の物を持ち込み、優雅に刑務所生活をしている囚人がおり、拳銃や麻薬まで手に入れている囚人もいる、女性は面会時に性器内に携帯電話や薬物を忍ばせて入ることが頻繁にニュースで報道されている。リオ・デ・ジャネイロでは刑務所内に豪華なベッド、バス付寝室、大型 TV、ステレオ付きの囚人の部屋が発見され全国ニュース大騒ぎ、即刻解体されたニュースが TV で放映された、いったいどうやって改築したのか想像を絶する。さらに刑務所内に事務所を設けて携帯電話で麻薬組織を操っている者までいる。刑務所内には犯罪組織のグループが出来ており、護身料を払ってグループに入り命を守ってもらっている、いずれかのグループに属しないと拷問、性的暴力を受け何時殺されるかわからないことになる。なにが治安国家なのかわかったものでない。また最近では女性刑務所でケーキを配り、薬物を回し飲みして誕生日を祝っている様子が囚人の携帯電話からビデオで外部に流されたニュースが報じられた。刑務所所員を買収して刑務所を出てしまう者までいる、なにかすごく偉大な力、権力までが金銭で自由に売買されているのではないだろうか。

またブラジルでは囚人が親近者（奥さん、旦那、恋人）の訪問を受け、刑務所内でひと時を過ごすことが出来るようになっている。ニュースを見て驚いたのは、刑務所内で囚人が心臓麻痺で死亡（バイアグラの飲みすぎ）、その部屋には17歳の少女がいたという。明らかに親近者ではなくお金で買われた少女である。これで一時期刑務所への訪問が厳しくなるが、“マイゾウ・メーノスの世界”また元に戻ってしまうと思われる。日本であれば面会時、ガラスの仕切り越しに指を触れることしか出来ないのだが。

刑務所は箱詰め状態で立って寝ることしか出来ない状態でも、カトリックの慈悲の精神のため、感謝祭の日、母の日、父の日、子供の日、死者の日(日本のお盆に当たる)やクリスマスなどの日には逃亡の危険のない囚人は年 5 回に限って 7 日間一時出所ができる。



写真は Daily News Agency

2015 年には年約 4 万 9487 名が一時出所し、約 5%の 2305 人が戻らず逃走しており毎回 5%から7%の囚人が戻らない、それでもこの恩赦は実施されている、これがカトリック精神なのか。また上級教育を受けた囚人(大学教育を受けた人)は罪が確定するまでトイレ付の独房に入ることが出来る。昔の特権階級の優遇制度の名残か。

また、ブラジルには懲役援助制度があり、囚人の扶養家族は囚人が得ていた所得最高額平均の 80%まで毎月受け取れる。その金額は 1200 ヘアルから 4500 ヘアル(約 4 万 2 千円から 15 万 7500 円)と言われており、一般社会で汗水たらして働くより高金取りになる。こんな優遇制度があるから囚人は刑務所から出所しようとはしないし、逆に罪を犯して刑務所に入ったほうが家族は助かるのかも。そのため面会日の日には早朝から刑務所の入り口は長蛇の列となり、ほとんどの女性は大きな買い物袋や、挙句の果てはスーパーの買い物カートに食料を詰め込んで面会を待っている。生鮮食品や生肉まで入れて待っている姿が TV の映像に映りだされる、どうやって刑務所の中で食べたり売ったりするのか。

これもブラジルの“マイズウ・メーノスの世界”の一面である。

追記

2017 年 1 月にアマゾナス州で発生した刑務所暴動の世界

アマゾナス州マナウス市近郊のアンジオ・ジョビン複合刑務所で、2017 年 1 月 1 日から 2 日朝にかけ 17 時間以上に渡り収容者による犯罪組織間の対立による大規模な暴動が発生した。収容者 56 人が死亡し、近隣の収容施設を含み 100 人以上人が逃亡した(後日、脱走者は 225 名と報道される、正確な人数が把握できない管理の

ずさんさである、)。

暴動が発生した刑務所はマナウスとロライマ州都ボア・ビスタを結ぶ国道174号線沿いにある。暴動発生時、454人定員の刑務所に3倍近い1224人が収容されていた。(後日の報道では、定員380名に対し、1922名が収容されていたとある)。暴動は1日午後が発生、



写真—アネジオ・ジョビン複合刑務所 topy one

首を切断された6人の遺体が刑務所外に投げ出されたほか、刑務所内では腕や足が切断された遺体や焼死体などが多数見つかっている。死亡者は犯罪組織州都第一コマンド(PCC)のメンバーと強姦罪による受刑者がほとんどで、北部の犯罪組織ファミリア・ド・ノルテ(FDN)のメンバーが麻薬密売に絡む対立で暴動を指揮したと報道されている。

同じ1日に近隣するトリンダーデ収容施設でも暴動が発生し87人が脱走した。2施設から脱走した被収容者は184人となり48時間で約40人が拘束されたがいまだ140人以上が逃亡している。後日14日の報道では脱走者は225名、80名は再逮捕され、145名が逃走中。犯罪組織間の暴動を阻止するため、移送された他の刑務所でも暴動が発生し4名が殺害されている。



写真—Divulgação

さらに6日には、ロライマ州最大の刑務所モンテ・クリスト農業刑務所で囚人33人が殺害される事件が起きている。一部には何名殺されて埋められているか不明との報道もある。遺体は斬首、切断などで痛めつけられた状態だと言われている。ここでも犯罪組織PCCとコマンド・ヴェルメーリョ(赤い部隊—CV)が勢力争いをしておりPCCの囚人による犯行とみられている。モンテ・クリスト農業刑務所でも定員の倍以上にあたる1400人が収容されており、広い刑務所内には、収容所の他にテントや板で作られた貧民街の小屋のようなものがいくつも作られ囚人が自由に生活している。

ブラジルの刑務所は各州から委託された会社が刑務所内の清掃、囚人への法的社会保護及び、囚人の監視を行っており、直接囚人の治安維持にはかかわっていない。また警察は州からの依頼がない限り刑務所内への立ち入りや、治安維持を直接行うことはできない。



写真—Retorter-am.com.br

このような無秩序な状態の各刑務所には、携帯電話、刃物、薬物や火器の持ち込みの料金表があり、金さえ払えば自由になんでも持ち込めるといわれている。そのために各地の刑務所ではトンネルを掘ったり、塀を壊したり、塀を乗り越える脱走が絶えないし、囚人同士の闘争があり、暴動に発展することが頻繁に発生している。

今回発生した暴動で殺害された囚人の家族に対して州政府が囚人の生命保護を怠った理由で保証金を支払う検討が行われている。それでは囚人に殺されたり、被害にあった一般州民の家族に州政府が州民の安全保護を怠った理由で保証金を払っているか、それはない。大きな矛盾を感じえない。

- ブラジルには約 1050 の刑務所があり約 26 万人の収容能力に対して、約 62 万人が収容されている。米国、中国、ロシアに次いで 4 番目に多い。このうち約 40%は第一審の判決待ちの仮留置者、ブラジルの裁判の手続き、審理、判決がいかに遅いかわかる。
- “死のゲートレード” といって麻薬入りのカクテルを大量に飲まされ。
- ブラジル国内の大きな麻薬組織は、首都第一コマンド(PCC)、コマンド・ヴェルメーリョ(赤い部隊—CV)、ファミリーア・ド・ノルテ(北の家族—FDN)がある。FDN は CV 寄りであり、これらの組織が刑務所内でも勢力争いをしている。
- 2016 年には 392 人が暴力で殺されている。
- 囚人一人当たりにかかる経費は月額、サンパウロで約 2100 レアル(約 7 万 3500 円)、アマゾナス州は約 5800 レアル(約 20 万 3000 円)と約 3 倍、それでもアマゾナス州では暴動、脱獄が頻繁に起こっている。
- マナウス市周辺の刑務所は、アントニオ・トリンダーデ刑務所(BR-174 8Km)、アニージオ・ジョビン複合刑務所(BR-174 13Km)、プラケクアラー刑務所(第二工業

団地奥 24Km)、ハイムンド・ヴィダル・ペソア判事刑務所(市内)の4つがある。

- 1992年にはサンパウロのカランジルー刑務所内で暴動が発生し、鎮圧のため刑務所内に警察が突入し囚人111名が死亡した事件が発生。警察の行動に関する裁判が昨年2016年末まで行われ、警察の無罪が確定。
- 今回2017年1月の刑務所騒ぎは
 1. 1月1日-アントニオ・トリンダーデ刑務所で囚人87名が脱獄
 2. 1月1日から2日-アネージオ・ジョビン複合刑務所で暴動が発生、囚人56名が殺され、112名が脱獄。
 3. 1月2日-プラケクアーラ刑務所で囚人4名が殺される。
 4. 1月6日-ローライマ州モンテ・クリスト農業刑務所で囚人33名が殺される。
 5. 1月8日-ハイムンド・ブダル・ペソア判事刑務所で囚人4名が殺される。
 6. 1月8日-アマゾナス州、ローライマ州が国家治安部隊(FN)の派遣を連邦政府に依頼。
 7. 1月10日-刑務所内部告発にもとづき、アネージオ・ジョビン複合刑務所所長が賄賂受領の理由で定職処分となる。

一次号第33話へ続くー